2018 年度　事業報告書

NPO 法人ゆいツール開発工房（ラボ）

目　次

１．　団体の設立趣旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

２．　団体の目的と主な事業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

３．　団体の役員・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

４．　会計報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

５．　活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

１．団体の設立趣旨

つながりあう社会へ

私たちは今、高度な効率化・情報化がすすんだ、便利な社会に暮らしています。
しかしその裏で、人と人の繋がりは薄れ、深い孤独感が蔓延し、 地域コミュニティが崩壊するなど、 社会の問題も深刻化しています。
世界では、これまで貧しいと言われていた国々が急激に発展し、豊かさを享受する人が増える一方で、開発による環境破壊、貧困格差、エネルギー・資源をめぐる問題など、多くの深刻な事態も表面化しています。
そんな中起きた東日本大震災と原発事故は、私たちにコミュニティの大切さとその危機を痛感させました。
今、こうした数多の問題を抱える社会を生きていくためには、多様な情報や選択肢から、自ら考え、選び、行動する力を一人一人が身につけることが肝要です。しかし過剰な情報や便利すぎる社会はその力を奪い、生きる力を弱めています。

ゆいツール開発工房（ラボ）の主メンバーは、環境省の体験的な学びの場づくりに６年以上携わってきました。その現場経験の中で、市民の手による課題解決の必要性と、コミュニケーションによる学び合いの可能性を見い出しました。
人と人の関わり合いや繋がり合いが、社会の中で損なわれつつある「絆」や「生きる力」「生きる知恵」を取り戻す鍵ではないかと考えます。

そこで、「NPO 法人ゆいツール開発工房（ラボ）」を設立し、人と人の結びつきを生み出す道具やしくみ（ゆいツール）を開発することで、社会の中にコミュニケーションや学びの機会を増やし、地域でさまざまな人たちがともに学び合う基盤づくり、持続的に活動展開できる環境づくりなどをサポートし、持続可能でいきいきとした地域コミュニティづくりのお手伝いをしていきたいと思っています。

※ゆいツールは、2010 年 10 月に設立され、2011 年 9 月に NPO 法人として登録されました。

２．団体の目的と主な事業

ゆいツール開発工房（ラボ）は、広く日本や世界の人々に対して、ESD（持続発展教育）プログラム開発をはじめとした教育活動事業等を行うことで、社会の中に世代や立場を越えたコミュニケーションや学び合いの機会を創出し、地域コミュニティの持つ課題（環境破壊、少子高齢化、地域文化の衰退など）の解決や、持続可能な社会構築に寄与することを目的とする。

(1) ESD（持続発展教育）に関わるプログラム開発事業

(2) ESD（持続発展教育）に関わる人材育成事業

(3) ESD（持続発展教育）の社会展開のための事業

(4) 教育活動、地域活性化事業等を行う他の団体との情報交換及びネットワークの構築事業

【過去の主な事業】

・インドネシア・ロンボク島における村ツーリズム開発プログラム（2016年度～2018年度）

・インドネシア・ロンボク島における環境保全のための ESD プログラム開発・人材育成事業（2013 年度～2015 年度）

・インドネシア・スマトラ島の森林保全をテーマとした ESD プログラムの開発（2012 年度～2015 年度）

３．団体の役員

ゆいツール開発工房（ラボ）は、以下の役員によって運営されている。

理事長	山本　かおり	
副理事長	小嵐　妙	一般社団法人地球温暖化防止全国ネット
理事	松原　裕子	有限会社イリュージョンミル代表取締役
理事	松原　雅裕	デジタリウムプロジェクツ！主宰
理事	森　高一	森企画
監事	小山　庄三	

４．会計報告（2019 年 5 月現在案）

特定非営利活動法人ゆいツール開発工房（ラボ）　貸借対照表（2018 年 3 月 31 日現在）

（単位:円）

（資産の部）		（負債の部）	
預金	272,496	仮受金	6,291
未収金（会費関係）	15,000	未払い金	12,571
未収金（助成金関係）	227,709		
未収金（寄付）	5,000	（正味財産の部）	
		一般正味財産	501,343
資産合計	520,205	負債・正味財産合計	520,205

2018年度 特定非営利活動に係る事業 活動計算書
2018年4月1日から2019年3月31日まで

特定非営利活動法人ゆいツール開発工房（単位：円）

科　　目	金　　額		
Ⅰ　経常収益			
1　会費・入会金収入			
会費・入会金収入			
会費収入（正会員）	60,000		
会費収入（賛助会員）	27,000	87,000	
2　事業収益			
①ESD に関わるプログラム開発事業	1,550,000		
②ESD に関わる人材育成事業	0		
③ESD の社会展開のための事業	77,500	1,627,500	
3　寄付金収入			
寄付金	17,000	17,000	
4　その他収益			
利息	5		
雑収入	100,020	100,025	
経常収益計			1,831,525
Ⅱ　経常費用			
①ESD に関わるプログラム開発事業			
（１）人件費	449,584		
（２）その他経費	1,141,857	1,591,440	
②ESD に関わる人材育成事業			
（１）人件費	0		
（２）その他経費	0	0	
③ESD の社会展開のための事業			
（１）人件費	42,500		
（２）その他経費	78,350	120,850	
雑費	77,238	77,238	
経常費用計			1,789,528
当期経常利益額			41,997
当期正味財産増減額			**41,997**
前期繰越正味財産額			507,634
次期繰越正味財産額			549,631

特定非営利活動法人ゆいツール開発工房（ラボ） 貸借対照表（2019 年 3 月 31 日現在）

（単位：円）

（資産の部）		（負債の部）	
預金（１）	559,011	預り金（会費関係）	9,000
預金（２）	100,020	預り金（寄付金）	99,200
		未払い費用	1,200
		（正味財産の部）	
		一般正味財産	549,631
資産合計	659,031	負債・正味財産合計	659,031

貸借対照表脚注
・預かり金（会費関係）は、正会員会費 6,000 円と賛助会費 3,000 円で、2019 年度分として前受けしたものである。
・預り金（寄付金）は、5 月 16 日に支出済である。
・未払い費用 1,200 円は、5 月 7 日に支払い済である。

５．活動報告

（1）インドネシア・ロンボク島における村ツーリズム開発プログラム
～村ツーリズムのさらなる発展と若者の人材育成とともに～

公益信託地球環境日本基金の助成を受けて、昨年度より引き続きインドネシア・ロンボク島での活動を以下のとおり行った。（より詳しい報告は、別紙の地球環境日本基金報告書に記載）

①　若者向けスタディツアーの実施

A.　ギリ・メノ島、ギリ・アイル島他
【日時】2018 年 6 月 24 日（日）～25 日（月）
【目的】ロンボクの若者たちが、ごみを減らす取り組みについて学んだり、活動に参加したりすることで、環境問題をより意識し解決のためにできることを行う。
【参加者】ティア（ウダヤナごみ銀行）、オパン、タンティ（中部ロンボクランタン村）、ハピス（西ロンボクグングラン村）
【内容】
a. 芸術村 Kawis Kerisant（カウィス・クリサン）見学、NTB マンディリごみ銀行アイシャ氏とディスカッション
b. ギリ・メノ島トラッシュ・ヒーローのクリーンアップ活動に参加
c. ギリ・アイル島の日本人が経営するバンガロー「Old village」で、エコ活動に関する打ち合わせ

<その後>
ギリ・アイル島の「Old village」で、エコガーデンを作る計画を立て、7 月に 2 回現地で若者たちが作業を行った。
その後、8 月の大地震の影響で、「Old village」は一時休業になり、計画も中断してしまった。

B.　西バリ国立公園
【日時】2018 年 12 月 16 日（日）～18 日（火）
【目的】ロンボクの若者たちが、西バリ国立公園を訪れ、国立公園と住民グループの協働の様子、村ツーリズムの参考になりそうな活動を学びながら、中部ロンボクのランタン村での村ツーリズムについてプレゼンをして、お互いに学びあう。
【参加者】オパン（ランタン村）、マデ（西ロンボクブウン・スジャティ村）、ルス（東ロンボクスンバルン地区）、サムスル（中部ロンボクプンデム村）、コマン（ゆいツールボランティアアシスタント）
12 月 16 日（日）スンブル・クランポック村
a. Kedai Sawo Kecik（若者たちが作った小さな植林公園）、b.花栽培などをしている農家を訪問
c. 農業用水活用グループ
12 月 17 日（月）西バリ国立公園事務所、ギリマノ村
d. 国立公園の活動内容について学ぶ
e. ツーリズムのために協働している住民グループと情報交換、見学

C.　ギリ・メノ島他
【日時】2018 年 12 月 27 日（木）～28 日（金）
【目的】ロンボクの若者たちが自分たちの島の観光地を知るため、およびギリ・メノ島のトラッシュ・ヒーローの活動について知るため。
【参加者】マデ（西ロンボクブウン・スジャティ村）、ルス（東ロンボク、スンバルン地区）、コマン（ゆいツールボランティアアシスタント）
【内容】
a. 西ロンボクのクカイ村に新しくできた観光地「グラ・アレン・アグロツーリズム」を見学
b.ギリ・メノ島でシュノーケリング体験
d. トラッシュ・ヒーローとディスカッション
e. ビナ・ブダヤごみ銀行訪問（西ロンボクグヌンサリ地区）

<その後>
B と C のスタディツアーに参加した後、5 人のメンバーは環境保全や村ツーリズムを目的とする「ドゥルカディ・チーム」を結成した。3 月末の日曜日に、観光地のスンギギの海岸清掃活動に参加した。

写真①－A－1　NTBマンディリごみ銀行にて

写真①－A－2　ギリ・メノ島クリーンアップ活動

写真①－A－3　クリーンアップ活動参加

写真①－A－4「Old village」での活動の様子

写真①－B－1　Kedai Sawo Kecik

写真①－B－2　花摘み体験

写真①－B－3　国立公園について学ぶ

写真①－B－4　ギリマノ村の住民グループと

写真①－B－5　マングローブの植林体験

写真①－B－6　ツアー参加メンバー（若者 4 人）

写真①－C－1　シュノーケリング体験

写真①－C－2　トラッシュ・ヒーローと意見交換

【コメント】

・6 月のスタディツアーの後、ギリ・アイル島の「Old village」で、エコガーデン作りがスタートしたが、8 月の大地震で中断してしまい残念だった。

・西バリ国立公園スタディツアーに参加したメンバーは、その学びをきっかけにして自分の村で環境保全や村ツーリズムの活動に熱心に取り組んだり、ゆいツールの活動に参加して経験を積んだりしたほか、メンバー同士で刺激し合える「ドゥルカディ・チーム」を立ち上げた。このチームは、次年度のゆいツールの活動の実働部隊になる予定である。

②　ランタン村の村ツーリズムの活動紹介

ゆいツールが開発したランタン村の村ツーリズムについて、若者自身が他の場所でプレゼンを行い、実績をアピールした。

A. ブウン・スジャティ村
【日時】2018 年 6 月 28 日（木）
【紹介者】タンティ、ティウィ、トゥリスナ、オパン（中部ロンボクランタン村）
【参加者】ブウン・スジャティ村の若者 10 人程度

B. 西バリ国立公園ギリマノ村
【日時】2018 年 12 月 17 日（月）
【紹介者】オパン
【参加者】西バリ国立公園スタッフ スギアルト、ギリマノ村の住民グループ 15 人程度

【コメント】

・ブウン・スジャティ村では、主にタンティが活動を紹介した。村ツーリズムは、村にある自然や文化や人々の日常の活動を、訪問客に提供することでおもてなしをすることである、ということを、ブウン・スジャティ村の若者たちに紹介できた。

・ギリマノ村の住民グループは、ランタン村の村ツーリズムの話を聞いて非常に興味を持っていた。彼らの行っているツーリズムとは違うタイプのものであったため、何もない村でも訪問者を楽しませることができる、ということを知って驚いていた。

写真②－A ブウン・スジャティ村でのプレゼン

写真②－B　西バリ国立公園ギリマノ村で

③　中部環境局スタッフによるプレゼンとTPS（小規模ごみ処分場）見学

A. プレゼン
【日時】2018 年 10 月 9 日（火）10:00～12:00
【協力】中部ロンボク環境局スタッフ　マアス氏
【参加者】ランタン村の女性や若者ら 30 程度
【内容】
中部ロンボクのごみの現状、ごみの分別について、ごみの問題等について話をしてもらった。参加者との質疑応答があった。

B. ごみ処分場見学（中部ロンボクコパン地区スンパル村）
【日時】2018 年 10 月 16 日（火）9:30～11:30
【参加者】オパン他ランタン村の若者数人
【内容】
中部ロンボク環境局管轄、スンパル村の住民グループによって管理されている小規模ごみ処分場を見学した。

【コメント】

・ランタン村で、中部ロンボク環境局のマアスさんに行政の側のごみの管理について話を聞いた。そこで初めて知ったのは、村に環境局がごみ収集に来ないのは、村の側でコンテナを準備していないからだ、ということだった。コンテナを村の予算で購入し、環境局に連絡すればごみ収集をしてもらえるそうだが、結局周辺の村でコンテナを所有しているところはなかった。

・環境局としては、各村にコンテナが置かれて収集に回るよりも、TPS（小規模ごみ処分場）が各村にできて、村単位でごみを減らしてほしいと望んでいる。TPS とはどのような場所か、村の若者から質問が出た。中部ロンボクコパン地区スンパル村に、住民が運営するごみ処分場があることを知る。1 週間後に希望者を募って見学に行った。

・スンパル村の小規模ごみ処分場は、ジャカルタ中央政府のお金で整備されたが、住民グループが管理している。焼却炉があったが、最初に造られたものはメンテナンスにお

金がかかったり、周辺の作物が枯れるなど悪い影響があったりしたために使われなくなっていた。代わりに、住民が造った簡易の焼却炉が稼働していた。

・ごみ処分場では、生ごみをコンポストに、お金になるプラスチックごみや段ボールなどは廃品業者へ売って、残りの汚れたプラスチックを含んだごみのかすを焼却炉で燃やしていた。

・ランタン村の若者は興味津々な様子で、働いているスタッフに色々と質問をしていた。ただ、施設をきちんと造ろうとするとある程度のお金が必要だ、と気づき、村役場の協力などがないと難しいと知った。

⇒その後、12 月にオパンから廃プラスチックを使ったブロックの試作品を見せられた。プラスチックを加熱してブロック状にすれば、建築資材として半永久的に使えるだろう、と話す。ブロックを製造する機械を作れたらいいのだが、という話になる。

写真③－A－1　環境局スタッフのプレゼン

写真③－A－2　プレゼンを聞く村の人たち

写真③－B－1　ごみ処分場見学

写真③－B－2　分別されたプラスチックごみ

④　モニターツアー、学生の受け入れなど

A. 在住日本人向けモニターツアー
（ブウン・スジャティ村）
【日時】2018 年 6 月 30 日（土）
【参加者】在住日本人 2 名

B. 学生の受け入れ
・2018 年 7 月～8 月（16 日間）　名古屋市立大学大学院 1 名
・2018 年 10 月（4 日間）　明治大学学生 1 名
・2018 年 11 月（2 日間）　東京農工大学生 1 名
・2019 年 2 月（9 日間）　上智大学学生 1 名
・2019 年 2 月～3 月（8 日間）　上智大学学生 1 名と妹
・2019 年 2 月～3 月（14 日間）　酪農学園大学大学生 1 名

【コメント】

・モニターツアーに参加した日本人 2 名は、ロンボク暮らしが長いにも関わらず、村での暮らしはほぼ皆無だったため、とても新鮮な体験になったようで、マウンテンバイクでのサイクリングや自然の豊かさを非常に気に入っていた。

・今年度は、7 月 8 月に大きな地震がロンボク島を襲った。逆にそのことによりロンボク島を知った若者などから、ツアーの依頼の問い合わせが多かった。

・訪問した学生たちはじっくりとロンボク島の文化や宗教、環境問題に触れ合うことができた。村に滞在した学生も多かったので、ランタン村やブウン・スジャティ村の若者にとって、経験値を磨くよい機会となった。また、村の若者が訪れた日本の学生に、提供している村ツーリズムへのフィードバックを求めるなど、学びあう姿勢も見られた。

・ツアーに参加した学生たちも、同世代のインドネシアの若者との交流が刺激になったり、ツアーの中でごみ問題を考えたり、村の暮らしの中から日本の暮らしでは気づくことのできないことに気づいたりしていた。

写真④－A　モニターツアー

写真④－B－1　学生の受け入れ（10月）

写真④－B－2　学生の受け入れ（11月）

写真④－B－3　学生の受け入れ（2月）

⑤　名古屋市立大学の曽我ゼミ向けエコツアー

曽我ゼミは、2017 年度よりロンボク島を訪れ、ESD の視点から環境問題、村の暮らし、人との関わりなどを学んでいる。今年度は、ゆいツール主催のエコツアーが開催できなかったため、村の若者にとってはこのツアーが貴重な体験の場となった。

【期間】2019 年 3 月 5 日～10 日（6 日間）
【参加者】5名（うち曽我先生と記録係の社会人の女性はロンボクは2回目。一名は日本に留学中のインドネシア人女性。酪農学大学の大学生ひとりが途中から合流）
【スケジュール】（5泊6日）

日にち	内容
3月5日（火）	ジャカルタからロンボク島へ。ビナ・ブダヤごみ銀行を訪問。
3月6日（水）	ランタン村へ。村での体験。住民のお宅へ宿泊。
3月7日（木）	村での体験。住民のお宅へ宿泊。
3月8日（木）	ブウン・スジャティ村へ。ココナッツの葉っぱで帽子づくり、マウンテンバイクでサイクリング、滝で昼食、川沿いのあずまやで休憩、バリ音楽を体験など。ガイドのマデとディスカッション。
3月9日（金）	小学校見学、バリの寺院見学、地震体験者（日本人）の話を聞く。
3月10日（土）	織物の店、空港へ見送り。

写真⑤－1　ランタン村で

写真⑤－2　ブウン・スジャティ村で

【コメント】
・ランタン村では、滝で遊んだり伝統菓子を作ったり、割礼の儀式見学や村の暮らしを体験した。2 泊だけの滞在で、雨に降られることも多かったが、村の子供や若者たちと濃密な時間を過ごした参加者は、日本では得られない気づきを得ることができたようだった。
・今年は、西ロンボクのブウン・スジャティ村も訪問先に加えた。この村は、2018 年 6 月に初めてゆいツールが訪れてから、④で記載した通り、在住日本人向けにモニターツアーを実施したり、日本人学生を何度か案内したり、少しづつ訪問者慣れしてきたところで 3 月に 5 人のツアー客を連れて行った。ガイドのマデは、①で記載した 12 月のスタディツアーに参加しており、バリで学んだことや過去の学生への体験で学んだことを生かして、1 日の体験プログラムを準備・実施してくれた。
・ランタン村は 100%ムスリムの村だが、ブウン・スジャティ村はバリ人（ヒンドゥー教徒）とササック人（イスラム教徒）が混じり合って暮らしている。そういった特徴もツアー客は体験することができた。

⑥　ランタン村　村ツーリズム紹介パンフレット（英語）作成

ランタン村の村ツーリズムを、ロンボク島を訪れる外国人に紹介するために、ランタン村の若者が英語でパンフレットを作製した。

パンレフットは 1000 部印刷し、500 部を Lantan Ecotourism へ渡した。

写真⑥－1　パンフレット A4 三つ折り（両面カラー）

⑦　3 年間の活動集大成の発信（WEB 上のみ）

3 年間の活動の成果をまとめ、ゆいツールのホームページで閲覧できるようにした。写真を多用し、活動が具体的に伝わるように工夫した。

⑧　東京でのイベント出展（10月）

●グローバルフェスタ2018

【日程】

2018年9月29日（土）10:00～17:00

※台風接近のため、1日だけの開催となった。

【場所】

お台場　センタープロムナード（東京都江東区）

【来場者数（会場全体）】

約4.3万人

【出展内容】

・ロンボクの活動紹介パネル「ごみ銀行」「村ツーリズム開発」

・その他の活動紹介パネルや体験プログラムツールの紹介など

・プラスチックごみから作ったクラフト類

【コメント】

・朝から夕方まで、小雨の降る中での出展で、関係者以外はほぼいない感じだった。

・ゆいツールのブースには学生がふたり別々に来て、インタビューをしていった。

・12 月のエコツアーを、ボランティアの子が熱心に PR してくれた。

・タイヤをリサイクルして作った財布とペンケースを、男性が買ってくれた。

・今年は、プラスチックごみを再利用した商品を売るブースが、いくつかあった。多くはフィリピンで活動する団体だった。

写真⑧－1　　ブースの様子

写真⑧－2　販売したクラフト類

★3 年間の総括

この活動を通しての成果としては、ロンボク島で村ツーリズムが広がるきっかけを作ることができたことである。

1 年目は、中部ロンボク北バトゥクリアン地区タナ・ベア村のトニーさん（BC 英語教室主宰）の協力を得て、日本の学生が計 2 回タナ・ベア村に滞在することができた。

2 年目は、隣のランタン村に場所を移し、トニーさんがサポート役になりランタン村の若者自身がツアーの準備・運営を行った。12 月と 2 月にツアー客を受け入れた後、若者たちは“Lantan Ecotourism”を立ち上げ、3 年目には複数回日本の若者が村に滞在することとなった。

トニーさんは、引き続きタナ・ベア村で、BC 英語教室の訪問客（欧米人）を迎え、村人と協力して観光スポットの開拓に勤しんでいる。

2018 年 2 月（2 年目）に実施した、「村ツーリズムの発展のためのフォーラム」には、100 名近くの参加者（在住日本人数人を含む）があり、「村ツーリズム」が村を発展させる有効な方法であること、「村ツーリズム」の発展は「ごみ銀行」の活動と深い関係があることなどをアピールすることができた。直前に作成した「村ツーリズム紹介パンフレット（インドネシア語）」も活用し、多くの人に「村ツーリズム」の意義を広めることができたと考えている。

3 年目は、Lantan Ecotourism の活動成果を、若者自身がいくつかの場所で発表したり、何人かの若者向けにスタディツアーを実施したりしたことで、ゆいツールの元で「村ツーリズム活動」「ごみの削減プログラム」に取り組む若者チーム（Tim Dulkadi）が発足した。

また、環境局スタッフの説明を直接聞く機会を設けたことで、中央および地方政府が住民に期待することを知ることができた。併せて、ランタン村の若者と一緒に中部ロンボクコパン地区スンパル村のごみ処分場を見学したことで、自分たちでごみを減らすことができるかもしれない、という展望を持った。ただし、村役場を動かさなければ施設の建築などは難しそうだ、という感触も持った。

3 年目に作成した「ランタン村の村ツーリズムを紹介するパンフレット（英語）」は、今後ロンボク島内のホテルやレストラン、旅行会社などに配布する予定である。

（２）明治学院大学での講義（5 月）

昨年度に引き続き、明治学院大学での講義でゆいツールのロンボク島での活動を紹介した。

【依頼元】一般社団法人地球・人間環境フォーラム（天野さん）
【日時】2018 年 5 月 17 日（木）16:45～18:15（のうち 1 時間）
【場所】明治学院大学白金キャンパス
【対象】法学部 3 年生 80 名程度　「世界の環境を考える」という講義の 1 コマ
【内容】「ゆいツールの活動紹介～ロンボク島でのごみ問題への取り組みと学生エコツアー～」

1．はじめに（10 分）
隠れテーマ「多様性を認めあうために」
私の経験
2．インドネシアのごみ事情、最近のマタラム市の様子（10 分）
～クイズタイム～
3．ごみ銀行ってなに？（10 分）
４．ロンボク島で村ツーリズム開発！？（学生エコツアーへのお誘い）（10 分）
５．アンケート「今日、一番興味深かったこと」

【コメント】
・今までよりぐっと人数が減って 80 名の学生たちに、1 時間話をした。
・ボランティアの三枝さんが、色画用紙（クイズで使用）を配ったり、写真を撮ったり、というお手伝いをしてくれた。
・過去 2 年間の学生より、海外のことに関心がありそうだった。
・クイズで色画用紙を使ったので、今までより参加型になってよかった。

写真（２）－1　　クイズに参加する学生たち

写真（２）－２　講義の様子

（３）　東海大学でのワークショップ授業（6 月）

【依頼元】東海大学非常勤講師（ウォン・ジョンビンさん）

【日時】2018 年 6 月 12 日(火)13:25～15:05(100 分)

【場所】東海大学湘南キャンパス

【対象】東海大学人間環境学研究科大学院生他 15 人程度

里山里地保全の研究、環境政策、環境問題、自然エネルギー、環境教育などを研究する学生

【内容】

先生から（10 分）
はじめに（自己紹介）（10 分）
インドネシアクイズ（10 分）
講義（40 分）
・ロンボク島の紹介とインドネシアのごみ問題
・ごみ銀行の活動と村ツーリズム開発
・ツアーに参加した日本の学生たちの学びについて
・ツアーに参加して（ゆいツールボランティアより）
プログラム体験「ごみってなあに？」（インドネシア用）（15 分）
おわりに（国際活動の意義について）（10 分）

【コメント】

・参加者の中には中国からの留学生もいた。

・ボランティアの三枝さんも同行して、プログラム体験の時に補佐してもらったり、2 月のツアーに参加した時の感想なども少し話してもらったりした。

写真（３）－1　　クイズの様子

写真（３）－2　　講義の様子

（4） JANNI 連続講座（12 月）

【依頼元】日本インドネシア NGO ネットワーク（JANNI）

【日程】2018 年 12 月 1 日（土）14:30～16:30

【場所】東京都渋谷区東 2-20-18　氷川区民会館集会室

【参加者】JANNI の会員、ゆいツールエコツアー参加者など 15 人程度

【内容】

「ロンボク大地震のその後と学校支援プロジェクト～ゆいツールの活動紹介とともに」

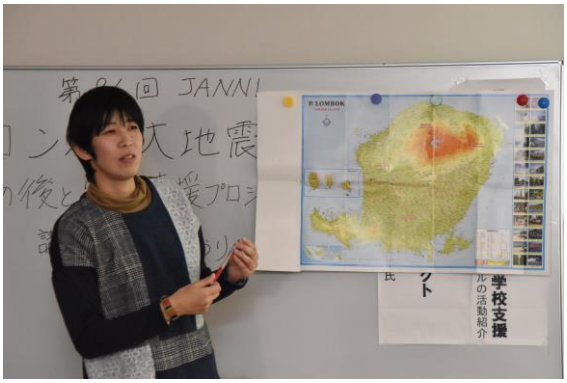
1．はじめに
　●自己紹介
　●ロンボク島について
◆インドネシアクイズ
2．ロンボク島大地震
3．ゆいツールの学校支援プロジェクト
4．10 月の現地視察の様子
5．ゆいツールのロンボク島での活動
6．今回の経験でゆいツールが学んだこと
7．これからのロンボク島の観光

【コメント】

・JANNI は、インドネシアの人権、環境、開発などさまざまな問題を改善するため、また日本とインドネシアの市民レベルの交流・ネットワークを広げるための団体として 1993 年に設立された団体で、25 年が経ち活動を終える前の最後の連続講座に呼んでもらった。

・講座では、ロンボクの地震のその後の様子、ゆいツールが行った学校へのテント支援のプログラムについて、それから普段ゆいツールがロンボク島で行っている活動についてなど、話をした。地震に強い構造物をインドネシアに普及した経験のある方や、インドネシアにゆかりのある方が熱心に話を聞いてくれた。

写真（4）－1　講座の様子



写真（4）－1　クイズの様子

NPO 法人ゆいツール開発工房（ラボ）
〒155-0032
東京都世田谷区代沢 2-19-12
メールアドレス：yuitool@gmail.com
ホームページ：http://yui-tool.jimdo.com/
ゆいツールブログ：
http://blog.goo.ne.jp/yui-tool
連絡先：090－4420－6867（代表携帯）